

- 私立大学環境保全協議会第7回海外研修報告 -

『ベトナム ホーチミンシティ工科大学』

東京理科大学薬学部教授

中村 洋

早稲田大学環境・エネルギー研究科

落合 澄

海外研修最終日の8月28日(火)は、早朝9時にホーチミンシティ工科大学環境工学部を訪問した。偶々この日は後期の講義が再開されたこともあり、キャンパス内には学生が溢れていた。先ず講義室に案内され、出張中の学部長に代わって副学部長の Vinh 博士と環境マネジメント科の主任をされている Ha 女史(修士、東大に留学の経験)からパワーポイントで学部の説明を受けた。それによると、環境工学部はホーチミンシティ国家大学によって1999年9月28日に設置され、環境工学科、環境マネジメント学科、研究室から構成され、現在は2名の教授、6名の博士、16名の修士を含む30名の職員で修士と学士の教育と研究を行っているとのことであった。ホーチミンシティ工科大学も含め、ホーチミンシティ国家大学に属する全ての大学の全学部で「環境と人間」に関する科目が必修化されているのは、驚きであった。研究については、JAICAの協力等により、エビ養殖場の汚染処理、魚加工装置の製造、ココア種を醗酵させる工程の効率化、アカシア樹脂の抽出などのプロジェクトが実施されていた。また、持続可能な水資源マネジメントに関してはIGES(International Global Environmental Strategy)との共同研究、日本の大学との学部学生交換プログラム等、研究・教育両面で国際協力も積極的に進めているのが印象的であった。



Vinh 博士と Ha 女史



分析実験中の学生

環境工学部の概要を伺った後、学生実習室と測定室を見学した。測定室には日本の援助によるGC/MS、原子吸光装置、イオンクロマトグラフなどがあり、今回訪問したベトナムの施設の中では最も近代化された分析装置が設置されていた。ベトナムは世界でも最貧国の一つと言われる。事実、ベトナムで最初に訪問したNGO施設(水環境科学技術研究所)では、日常の水質検査を手作業滴定で行っていた。あらゆる面で貧富の差が甚だしいのが途上国の特徴であるが、ホーチミンシティ工科大学の測定室で担当者が誇らしげに紹介

している先端的な分析装置を眺めながら、ベトナムの今後の発展を応援しなければならないと強く感じた。[中村 記]

実験室を見学したが、分析に必要な薬品類は中国製が多かった。確認しなかったが、コンピュータによる化学物質の管理は行われていない様子だった。ドラフト、ホットプレート、スターラー、天秤、振とう機、オートクレーブ、原子吸光、吸光光度計、TOC計、HPLCの分析機器があり、JISの工場排水分析の全項目を充分行える実験環境であった。



ホーチミン市の道路

市内の交通状況から大気汚染の問題が拡大すると思われる。また、下水の普及も十分ではなく生活排水が河川に流されており、水質問題の拡大も懸念される。ベトナムの経済成長に伴ってこれらの環境問題は、さらに大きな社会問題に発展する可能性が高い。市民への環境教育をはじめ、対策・改善を進めることが必須である。訪問したホーチミン工科大学環境学部は、ベトナムの環境問題を担う人材を育てる大きな役割を担っており、私大環協会員校の積極的な支援・協力が期待される場所である。(落合 追記)



ゴミ収集の様子